

人生苦と宗教

中 澤 要 實

いとぐち

人生は苦海である。その苦海の航海が人生の姿であらう。宗教は光明の燈台となれば又港となつて我等に慰安の笑顔を迎ゆる慈母であるとも想ひたい。然るに迷へる衆生はむしろ空しき蜃氣樓であるかの如く解するのである。われも人も共に知りつゝも迷ふ人生苦の悲しみに直面して始めて生ける法門の一節を味ふまゝに筆にまかせ随ひて綴りたいと思ふ。

人生と苦

人生の旅は苦の旅であらうか。苦しみ乍ら生きぬいて行く姿がとりもなほさず人生であるとするならば苦しみの連続は生きてゐる事實だとも考へられる。だから釋尊は娑婆世界を指して「苦の娑婆」と仰せられてゐる。又娑婆の語を譯せば忍土と、されば何處までも忍耐を持つて生きねばならぬ土地なのであらう。苦の種類を別ちて

四苦八苦となすが大聖釋迦の出家の動機もこれを出離せんが爲めの悟りの道であつたのである。されば人生とは苦の娑婆なりとの謂であらうか。

苦樂二道と一如

嗚呼人生とは苦なり、と云つたなら人として一日も生きて行く張合ひと云ふものがなくなるであらう。

結局する所は人生不可解と華嚴經か三途の河へ飛び込んで行く悲觀論者となつて終ふ。それでは生れ出た意義が何處にあるか解らない、何處までも生を享けた以上は強く正しく苦に打ち勝つて生き抜く所に苦の征服があり勝利が感じられるのである。所謂神の試練と惟ふ時、わが心は強く立ちあがり苦を甘受する心地になる即ち「うき事のなほこの上に積れかし限りある身の力ためさん」と奮ひ立つのである。最早その時の自己心内の感じは苦に非ずして苦を樂しむ心、喜ぶ心となつてゐる苦即樂、

苦樂一如の妙境に達してゐるのである。

されども苦は何處までも苦であり、樂は何處までも樂である。聖訓にも「苦は苦とさとり、樂は樂とさとり」と仰せになつてゐる。苦は苦であり樂は樂であつて苦樂は別なものであるが苦樂一如とも悟る、これ全く心の持ちやうである。人は斯様な人を苦樂超越の悟道の聖者と名付けるであらうが併し決して苦樂を感じない無神經者ではないのである。むしろ常人以上に苦樂共に感じが強いのであるが、たとその人達は苦樂に徹し切つて生じた心境でしかないのである。

人生苦と宗教心（日本の母の）

日本の母は人生苦の荒波を乗り切つた代表的な人であらう、その母が持つ宗教的安心は何處にあるかを吟味しやう。日本の母は實に忍従強く然もやさしい精神を持ち乍ら家を守り、我が夫に或は子を大君の御楯と奉つてゐる。然るに何等の不平等もなく護國の神靈と化した夫に或は子に對面する時の靖國社頭に靜かに頷く姿は全く苦樂一如或は超過の姿でしかあり得ないのである。この心境を作りあげたものは何か？ それは日本と云ふ偉大なる存在に對する宗教心から發露したものである。日本それこそ肇國本然の姿であり無始無終の活現体である

それを現人神である天皇の御稜威の上に仰ぐ時、偉大なる救ひの安心が日本の母の心境を包み、かくも嚴かな尊い姿となるのであると信する次第である。

人生苦と祈禱心

苦樂一如の悟道の妙境に達して終へば苦は苦として樂しむやうになるであらうが常人はやはり苦は苦であつて同時に悲しみである。されば苦を離れて樂を得、悲しみを捨てゝ喜びを拾ひたいと願ふは人情の常であらう。

されば貧人は富豪に、病者は健康者に蘇りたいと願ふ心は自ずと祈りの精神となり、行動となるのである。

この祈りの精神を安價な欲望や氣休みと嗤ひ、迷信と誨るものもあるであらうがこれ等のものには眞のまことの祈りを解せない無神論者や理性論者である。たゞこゝに祈る者の精神が身の程を考へざる我慾の爲や邪心を轉ぜずして祈りを満足せしめたいと云ふ處に祈禱精神の純性があり、迷信が存在することを認識して貰ひたい。されど正しき心にて神佛に祈れば必ず感應があるものである。殊に「法華經の行者の祈りの叶はざること有るべしや」である。

然るに祈つても驗しない場合がある。すると嗚呼やつばり氣安めの方便にすぎないと簡単に判斷を下して終

ふのである。私もこの程、二人の遺児をおいて家内に逝かれて終つた。すると人々の中には「神佛に仕へ、他人の祈禱までするお寺さんでさへ、この悲境に遇ふ、世には神も佛もありませぬね」とお悔みを頂戴する。しばし私も云ふ言葉を知らなかつた。それにはあれ程に醫者よ薬よと介抱した上、必ず全快を期して熱禱を捧げた積りであつたからである。されば悲しみの爲に心の眼もくらんで終つたのである。

然るに偶々教誌の管長法語に祈つても驗のない場合が二つある。一は誠意の缺如、一は定業である。これを拜讀した時、然だ、必全快を期して熱禱に驗しないのはやつぱり定業だつたのだと始めて思ひを訂正することが出来た時、心ある人の聲が聞えた。

「それまでの壽命だつたのですよ。おあきらめになつて元氣に働いて下さい」と慰められて始めて覺る安心決定であつたのである。因果觀或は宿命觀の安心門が如何に人生に於て人々の心を決定せしめるものかを感じた次第である。

信徒と安心觀

何んと云ふても我が日蓮宗の教線の擴張して行く現象は殊に動機は祈禱に生命があるやうである。諸經中王最

爲第一と叫んでも、自慢高慢の部類に數へ我田引水説の如くに取扱はんとするのが他宗權門輩の態度である。それよりも現證利益をそれこそ大衆が最勝王教と云ふも宜なりと肯く所以のものである。されども信徒の中には現世は法華經に救はれても後生は彌陀佛へと走る、これでは法華經も方便視されるだけの價値で眞實教の價値で眞實教の價値を發輝することが出来ない。殊に一代法華思想に至つては我利々々思想の用語視さるゝに至つては誠に遺憾千萬と云はねばなるまい。聖訓の「善につけ惡につけ法華經を捨るは地獄の業なるべし」と又は「命の通はんほどは南無妙法蓮華經と唱へ唱へ死する」と云ふ不惜身命の唱題護持の精神、終身護持の精神を持たしめないでは化用の利益は不始終と云はざるを得ない。祈禱行法が徒らに方便的手段で終るならば謗法の因の最大なるものと云ふても過言であるまい。

故に信徒に與へる法益は現證と同時に安心觀まで確立させねばなるまいと思ふ。即ち安心觀は定業を知り即ち三世因果の道理を極むるにある。三世因果觀も結局する原理は娑婆即寂光に主眼をおく事は法華經の見解としては言を俟たない所である。

方便即眞實

されども三世因果も宗教家の氣安めの方便の假説、即ちあきらめへの方便であると曲解するものがあつたならどうであらう？ 私はいかに假に方便であつても方便でない眞實門であると信ずる。譬へば此處に他土に寂光淨土を絶對的に信じてゐる信者があつたとするその信者は今正に娑婆を一期として幽冥界に赴かんとしてゐる。この時、寂光淨土不識の理性論者が「そんなお伽の國の都はない」と否定してその人が説いたとする。其處へ信仰甚深の方が來て淨土を讚美して佛と共に住する喜びを説いたとしたら、いづれがその人を救つた事になるであらうか。後者が假に方便であつたとしても、その人は幸福を感じて精神的には寂光の都へ行つてゐるのである。されば精神的救済價值から云ふて方便ではなくして方便即眞實の眞實門が展開されてゐる。

宗教の眞價

宗教の眞價は要する所、衆生の心の救済力が實踐的に有るか無いかによつて決定さるゝものと思ふ。

哲學的眞理性を有する單本覺の久遠本佛では眞價がない。衆生に對して垂迹應化即ち救済力があることによつて五百塵點已降教化してやまざる佛と稱して尊崇するの

である。故に佛は病める衆生の大慈悲の大御親として救済性に充満してゐるのである。さればこそ佛の眞實教は方便眞實無礙自在なる一大圓融の法門なのである。

宗教の眞價としての給仕

實踐的救済力を發揮する我等の行法は何んと言ふても給仕の實行である。三寶に仕へる事は佛を生かし衆生の心を蘇らしむ。國に仕へる事は君恩に報じ國家を安泰ならしめること結局自己安泰の理となる、それは因果律として當然の結果となるからである。

常不經菩薩の如く、人を拜がむ時、刀杖瓦石もあつたであらうが、それ等は時機未熟の故による時はかくも迫害多難を招くであらうが、拜めば拜まるゝ心となるこれは當然のことであらう。

この間信行道場生の手記に拜まれた感激を綴つてゐたが、拜む信者の心境からすれば個人的にその人が偉い偉くないと云ふた意味からではないのである。されば何故かと云ふに信行精進の行者は一意に祖師大聖人に給仕し拜んでゐる人達と思ふから拜むのである。

ミレーの名畫に「晩鐘の祈り」と云ふのがある。農民夫婦が靜かに夕焼の中にあつて一日の勞務に感謝しつゝ拜み合ふてゐる姿……。それは單に百姓夫婦の姿でしか

ないのであるがその中に神の心が生じ合ふ。するとその姿そのまゝが神の姿となるのである。本覺の如來はそこに顯現すると共に最早單なる佛ではない。この農民達夫婦の心を安らかに楽しいものにしてゐるのである。即ち救済教化して止まざる佛は現出するのである。「給仕第一は萬行の宗」と宜なりと信ぜざるを得ないであらう。

生死一切を法華經にまかせて、佛へ給仕出来るものこそ、眞の宗教を味讀し、生ける宗教を摘んでゐる人である。されば佛へ給仕して倦まざるものこそ世間苦を離れて生きぬく久遠の聖者であらう！。

む す び

徒らなる合理論は鬭争の巻を繰返してゐる。吾等はあくまでまろく従順に大信に住して三世救済の本化の行法に精進しやう。更に附言せば近時流行の科學性も、ともすれば物質的科學性に流るゝやうであるが精神的科學性を提唱したい。精神的科學性とは無形的價值論におへて決定さるべきものと思ふ。寂寥たる秋は如何なる人をも詩人となし哲學者にして行く、草を枕に秋の實相を科學して見やうか。更に人生とは？苦とは？宗教とは？……求道の旅は何處までつづく……人生とは苦なり、その苦しい旅こそ人生を意義づけてゐる楽しい旅である。それ

は宗教と云ふ慰ひの宿があるからであらう。今日日本は世界的日本に非ずして日本の世界となりつゝある。宗教も亦日本の世界宗教によつて全人類は救済さるゝものと思ふ。日蓮大聖人の氣宇もこの實現にあるのだ。立て！。そして元氣で苦しみ抜こうではないか。

俳 句

中 村 貫 一

短夜をふと目覺めては征く身なり
麥の秋征く身を語りかくも來し
古寺の地獄繪あせてかびにほふ
朝櫻菊の紋幕重りて有り（靖國神社）
おぼる夜の床に花なき花器二つ
五月雨の時計救心の音となる
隠元の花紫に梅雨かな
古池の水の青みや南風
日蝕へ兵馬汗する思ひふと
水苔に見せし杭あり水涸るる